

今村 宏之

1. 事業実施の目的

本事業では、筆者は博士論文のための予備調査を実施することが目的であった。調査協力団体が主催する 2 年に 1 度の大規模なイベントに運営側として参加することを条件に、当該団体の内部事情を知ることが許された。そこで筆者は、博士論文の記述の中核的な箇所になるであろう、活動戦略や利用される技術、資金調達や行政連携に関わる人的ネットワークの把握を試みた。

2. 実施場所

インドネシア共和国ジョグジャカルタ特別州スレマン県

調査協力団体タントウンガン・プロジェクト (Tangtungan Project) の事務所および事務作業やイベントに関連する店舗・場所

3. 実施期日

平成 29 年 7 月 3 日 (月) から 8 月 31 日 (木)

4. 成果報告

●事業の概要

0. 研究の概要

本研究では、インドネシアの国民国家形成期にナショナルなアイコンになることを期待して生み出された、ブンチャック・シラットと呼ばれる概念に着目している。ブンチャック・シラットは、既存の研究では、宗教儀礼や地方芸能、格闘の技術や神秘実践の場面でしばしば見受けられる文化実践であり、各地域・各世帯・各集団で、多種多様な形態で継承、伝達されてきたものの総称であると見なされてきた。筆者が参与した調査協力団体タントウンガン・プロジェクト (Tangtungan Project、以下タントウンガンないし調査協力団体と記す) は、外部から見ると、勃興する中間層による「伝統」文化の捉えなおしのための文化運動を推進する団体に見える。しかしながら、実際に内部に入り込んでみると、そうした単純な図式ではとらえられない、インドネシアのブンチャック・シラットに特有の社会的・歴史的文脈にからめとられ、かつそこからの脱却を目指して、当該団体が活動しているということが読み取れるようになってきた。

今回、学生派遣事業を通じて実施をした調査は、博士論文執筆のための予備調査にあたる。ここでは、調査協力団体の内実を民族誌的記述ないし「厚い記述」をするための足掛かりとして、調査協力団体が主催する、ブンチャック・シラットのフェスティバル (第五回ブンチ

ャック・マリオボロ・フェスティバル) にいたるまでの活動戦略や利用される技術、資金調達や行政連携に関わる人的ネットワークを把握するつもりであった。筆者は、今回の予備調査でおおよその調査項目を立てることを目的としていた。そして、本格的な長期調査でその全容をつかみ、最終的に博士論文では、民主化期インドネシアでの、一般市民による文化運動の一側面を、アパデュライの提示した「草の根グローバリゼーション」に関わる議論を用いて分析することを目標としていた。

1. インドネシア到着後

筆者は、学生派遣事業の助成により実施することのできた 2017 年 2-3 月の予備調査で、今回の予備調査を実施するための許可をタントウンガンからもらっていた。2017 年 7 月に、今回の学生派遣事業の助成により、2 度目の予備調査を実施できることになった。今回の予備調査では、タントウンガン・プロジェクトの主催で実施される一連のイベントの実行委員会の一員となり、彼らの活動を手伝う、という条件で参与観察を実施した。8 月 15 日に前夜祭として開催されたセミナーと、8 月 18~20 日に実施されたブンチャック・マリオボロ・フェスティバルである。

2. 第 5 回ブンチャック・マリオボロ・フェスティバルの概要

今回のフェスティバルでは、①ブンチャック・シラットとつながりの深い文化人や文化系大学教員を招聘して実施する、ブンチャック・シラットに関する学術的なセミナー、②外国人 22 人を招聘し、伝統的なシラットとともにインドネシアの文化を紹介する 4 日間のキャンプ・ツアー、③40 チームが参加するブンチャック・シラットの振り付け演舞コンテスト、④計 100 人程度が参加する写真撮影コンテスト、⑤幼稚園児から中学生まで計 70 人程度が参加する塗り絵・絵描きコンテスト、⑥伝統流派の方々による演舞会、⑦約 20 のスタンドが立つバザール、⑧計 12 流派による無料のワークショップ、⑨計 58 の流派、約 5000 人のシラット実践者が参加し、ジョグジャカルタ特別州警察長官、伝統流派の長老たちを VIP に迎えて実施する、目抜き通りのマリオボロ通りでのパレードが実施された。

今回のフェスティバルは、2011 年に開催されたものから数えて 5 回目である。パレードの参加者数で言えば、第 3 回 (2014 年) は 7500 人 (運営側の発表) で、周囲は回を数えるごとにさらに増員されるものだとばかり思っていたようである。実際には、5000 人と減少した。その代わりに、スマトラやカリマンタン、ジャカルタのブタウィ人コミュニティと綿密にコミュニケーションを図り、参加する組織の数を大きく増やした。これはタントウンガンの戦略の一つだったようである。

また、第 3 回フェスティバルで計画倒れになってしまった外国人向けの伝統文化・シラット体験ツアーを今回は開催することができた。外国人の参加者はツアー参加そのものには無料で参加することができ、ツアー参加だけでインドネシア滞在をするなら、ジョグジャカルタの最寄の空港までの往復の航空券代以外はタントウンガンが支払う、というもので

あった。

3. 調査協力団体の活動戦略

当該団体では、SNS の活用を重要視しており、フェイスブックやインスタグラム、ユーチューブを利用する。調査協力団体の設立当初の動機は、ブンチャック・シラットをテーマとする写真の質を向上させることであった。その後、伝統流派の活動アーカイブ事業やドキュメンテーションなどを不定期に実施するようになった。もともとのアーカイブ事業や写真撮影を重要視していた時期には、フェスティバルは、遠隔地に住むシラット実践者ら呼び寄せ、コネクションを形成し、のちの写真撮影を円滑化するための手段であった。現在はそうした活動は下火になり、フェスティバル開催を重要視するようになっている。

2019年9月に第6回のフェスティバルの開催決定がフェイスブックで告知されると、このフェスティバルを心待ちにしていたフォロワーは、「シラット実践者にとっての里帰りだ (mudiknya pesilat)」とコメントをつけていた。一般的にはインドネシアでは、西ジャワのスンダやスマトラのミナンカバウがシラットの故地とされる。今現在、シラットの鍛練を積み、シラットに関わっている人々にとっては、対立的な感情を湧き上がらせることなく、一堂に会することができる空間に愛着を覚えるのかもしれない。

調査協力団体は当初はジャカルタに拠点を置いていた。ジョグジャカルタに拠点を置くことになったのは、主催者の個人的な事情によるものであったという。彼らがいうには、ジャカルタにもシラット実践者は数多いたが、みな忙しすぎて、このような活動に集中的に協力し、資金集めを手伝ってくれる人はなかなかいなかったという。2012年にジョグジャカルタに拠点を移したことがきっかけとなり、この団体は人材や財源の確保に成功し、また、インドネシア各地で個別に展開しているシラット実践者のネットワークとのつながりを得られるようになっていった。

4. 「政治的中立」という主張

彼らによれば、ブンチャック・シラットに関わるフェスティバルそのものは今までもどこかで開催されてきた可能性はあるという。しかし、彼らが誇っているのは、その継続性である。第4回以降は原則として2年に一度の開催ということにしている。その理由は、大規模な選挙がある年には、こうした活動は選挙キャンペーンに利用されてしまうからだという。

2019年4月にはインドネシアで大統領選挙があり、2期目を目指すインドネシア初の平民出身の現職大統領と、軍人出身でスハルト元大統領と親密な関係をもつ大統領候補の一騎打ちである。とくに後者は、ブンチャック・シラットのオリンピック・スポーツ化を推進する組織である国際ブンチャック・シラット連盟の会長を務めており、2019年3月末には、選挙を意識したと思われる国際ブンチャック・シラット・フェスティバルがジャカルタで開催された。調査協力団体は、表立って主張はしないものの、政治的に中立であることを重要

視している。このような立場を維持できるのは、ジョグジャカルタという「伝統的なものを擁護する」という土地柄を利用しているからではないだろうか。

●本事業の実施によって得られた成果

1. 予備調査後に受けた調査協力団体からの要請

今回の調査成果を報告する前に、ひとつ前置きをしておかなければならないことがある。2017年7-8月の予備調査で佳境であった調査協力団体主催の大規模なイベントも終了し、調査期間ももう少しで終わるといふ頃、調査協力団体から「団体の構成員のプロフィールや個人的ネットワークが知られるような手掛かりを記述されるのは困る。たとえ偽名やフィクションを混ぜたとしても書かないでほしい。構成員や舞台裏がわからないようにして団体活動だけを記述するなら構わない。団体の活動やすでに公表されている情報などについて利用するのは構わない。団体が撮影した写真についても、事前に通知してくれば使用してもよい」という条件を提示された。当該団体は、たとえ日本語で書かれたとしても、申請者による内部事情の報告が団体の利益を損なうことになるのではないかと、ということを実剣に危惧していた。そのため、本報告書には利用していないデータがある。

筆者は予備調査などを通じて、十分にラポールな関係を形成できていたと思っていた。2012年に当該団体との関わりができて以来、当該団体とのコミュニケーションや活動への参加を通じて、シラットに関わる世界の複雑さを見せつけられるとともに、彼らの活動の苦悩・苦心を少しだけだが共有できていたと思っていた。しかしながら、予備調査のおかげで、調査協力団体の活動は、インドネシアにおけるブンチャック・シラットの歴史的展開の帰結に由来するものだという実感が深まった。同時に、調査協力団体の活動は一筋縄ではいかない、緊張感とスピード感に満ちたものだと改めて気づかされた。

参与観察で得られるデータを利用できなくなるのは痛手だったが、申請者は団体の要請を真摯に受け止め、研究計画を練り直すことにした。むしろ、彼らのそうした姿勢にこそ、身体技法論や、インドネシア政治における神秘教説といった多くの先行研究の論旨では語れない、ブンチャック・シラットに特有の事情が反映されているように見えた。

2. 研究の方向性の転換

内在的なアプローチだけで研究するのが難しくなってしまった。しかし、タントウンガンの活動を参照しないと読み解けないインドネシア特有の文脈があるように思われたので、筆者は研究の方向性を考え直すことにした。タントウンガンは、特定の宗教やサブ・エスニック・グループ、主義主張に依拠することを厭い、「中立的であること」をお題目のようにしている。ブンチャック・シラットとインドネシア政治の関係がいくつかの民族誌によって報告されているが、そうした報告を敷衍しても、当該団体のような活動の意味合いを読み解くことはできないように思われた。

先行研究ではあまり焦点化されることのなかった、インドネシア独立（1945年に日本か

ら独立。1949年にオランダからの独立戦争が終結する)以前の状況を文献資料で断片的にはあるが、再構成を試みた。また、日本のスポーツ社会学やスポーツの社会史では、1900年代のスポーツ概念流入以降の歴史研究が盛んになっていたため、それらの知見も活用した。こうした書籍を参照しているうちに、筆者は、ペンチャック・シラットという概念そのものの社会的布置の変遷が、全国組織がもつ演繹的で操作的なペンチャック・シラットの定義と、内在的アプローチに傾斜する先行研究と、調査協力団体のような萌芽的な文化運動とをつなぐ鍵概念になりうることに気が付いた。

筆者は、全国組織の言説や世間の理解、既存の研究においてはあまり検討されなかったような資料を糸口にすることにした。そして、ペンチャック・シラットという語彙に関わる演繹的に導き出された画一的な定義を、断片的ではあるが、帰納的に再考してみることにした。シラット小説というインドネシアの武侠小説の変遷から、シラットという語彙に含まれる意味合いの多様さを示すような研究が本研究の好例である。

ひとまず、これからの研究では、ペンチャックとシラット、ペンチャック・シラットという語彙そのものに焦点化することから始めるつもりである。

3. まとめ

今回の予備調査を通じて得られた気づきと調査協力団体の要請がきっかけとなり、筆者は、研究目的そのものを再考した。現在の本研究の目的は、ペンチャック・シラットという、一見、シンプルな概念がもつ、実際には複合的な組成の一端をつかむために、この概念を拡張的にとらえる視座を形成することである。調査協力団体の活動や言説を、全国組織によって操作的に形成された概念に単純に収斂させるのではなく、その視座から、両者の主張をインドネシアの社会的・歴史的文脈と重ね合わせて考察することによって、現代インドネシアにおけるペンチャック・シラットの社会的布置を明らかにしたい。そして、ペンチャック・シラットをとりまく社会状況から、インドネシアの今を読み解いてみたい

●本事業について

今回の予備調査は、研究者になることそのものの意味を考え直すとともに、自分にとっての研究の意味を根幹から再考するきっかけとなった。指導教員の先生方からあたたかい指導と叱咤激励を受け、本レポートを書くことができた。

学部生から人類学を学ぶ人の多くは修士課程で社会へと出ていく。本学を見てもわかるように、人類学系の博士課程に入学する学生のほとんどは、人類学にはじめて触れる外国人留学生か、学際系や新興の学部に入ってしまう、体系的に専門を学ぶチャンスを逃した人である。実際、筆者が所属していた学際系の学部では、研究者を志す学生は早々に学際教育に見切りをつけ、他学部の専門教育課程に飛び込んでいった。

本学にやってくる学生には一つ特長があると思われる。それは、具体的に調査したい対象や社会が先にあって、学術的文脈の把握は後に回るといった傾向である。多くの場合、対象社

会・調査対象とうまく折り合いをつけながら、内在的アプローチで格闘しているように見える。内在的アプローチをとる学生にとって、フィールド経験は命綱であると同時に、外部の助成金申請の際に記述の中心を占めることになる。

本事業を活用させていただけたことで、本研究の具体的な立ち位置をより明確にすることができた。本事業がなければ、研究活動を継続することができなかった。深く感謝している。今後、総研大に入学を志す学生のためにも、これからも学生派遣事業が継続されることを切に願っている。